

高田宗平編『日本漢籍受容史―日本文化の基層―』

佐々木 聰

本書の編者高田宗平氏には、既に高著『日本古代』論語義疏『受容史の研究』（塙書房、二〇一五年）がある。^①

また日本における漢籍受容史をはじめ、それと密接に関わる年號勘文、さらに多彩な漢籍の書誌學的調査研究の成果を國內外で精力的に發表してきた。本書はまさしく

高田氏の漢籍をめぐる廣汎な問題意識を集約した論集と言えよう。高田氏に據れば、「漢籍」とは「清朝以前に中國人が漢文（漢語）で撰した書物」であり、日本における漢籍の受容史を「日本文化の基層の一つとして捉え、その具體相を明らかに」することが本書の目的だと言う。

それゆえに本書は、二四篇の論文と四篇のコラムを収録する、大變充實した論集となっているが、もう一つユニークなのが、總論に代えて冒頭を飾る「口繪で辿る日本漢籍受容史―古代―近世初期篇―」である。まずはこちらを紹介したい。

この口繪は、(一)漢籍の傳來と書寫形態の諸相、(二)漢籍の書寫・利用と書籍目錄、(三)宋版の傳來と漢籍の書寫、(四)五山版・地方版の刊行と漢籍の書寫、(五)古活字版の刊行、の五節で構成される。各節はそのテーマの概説から始まり、テーマに沿った善本の圖版を例示し、圖版毎に

丁寧な解説を附す。収録された善本は計二三種、いずれも本邦における漢籍受容史の實態を示す第一級の文化財である。精細な口繪を眺め、解説を読み込んでゆくと、あたかも高田氏の監修になる「日本漢籍受容史」展の会場にいるような心地になる。

そして続く「序—本書の概要」では、先述の「漢籍」の定義と漢籍受容の意義を述べた上で、収録された各論文・コラムの要約と合わせて、當時の社會・制度・受容層についても丁寧な解説を加える。それによれば、漢籍は古代において上級貴族・中下級官人層、僧侶らにより受容されたが、中世ではさらに武家が加わり、近世に至っては、營利出版の盛行により市井に大量の和刻本が流通し、町人層にまで讀者が擴大したという。このように日本漢籍受容史の全體像を編者が示すことで、続く各論も精彩を放つことができよう。

以下に各論の目次を挙げる。

第一部 古代…

水口幹記「律令官人と漢籍」、池田證壽「僧侶と漢

籍」、土屋昌明「日本古代の典籍に見える神仙思想と洞天説の一側面」、高田宗平「天平勝寶勘奏に關する諸問題—遣唐使が齎したものの影響—」、山下克明「陰陽道・暦道・天文道・宿曜道と漢籍」、小倉慈司「攝關期貴族社會における漢籍收藏の様相」、松岡尙則「日本の醫學知識の受容」、高橋あやの「(コラム) 高松塚古墳壁畫とキトラ古墳壁畫の星宿圖」

第二部 中世…

小川剛生「韻書と學問」、水上雅晴「年號勘文と漢籍引文」、福島金治「年號勘文より見た南北朝期における朱子學の受容」、松下道信「中世神道の道教受容—吉田神道所傳『太上説北斗元靈經』版本再論—」、佐藤道生「清原家の學問と漢籍—『論語』を例として注釋書と訓點との關係を考える—」、奈良場勝「中世日本の易神の形成とその後」、中本大「(コラム) 五山禪林の學僧が見据えていたもの—日本文學史における五山文學の獨自性—」

第三部 近世…

入口敦志「漢籍の出版と讀者層―假名草子を基點として―」、大川眞「漢籍の『讀まれ方』―石門心學の分析を通じて―」、清水則夫「闇齋學派の『家禮』受容―稻葉迂齋を中心に―」、陳捷「江戸中後期好古家による古典籍裝訂・裝具研究について」、金培懿「龜門學の儒學觀と經書觀」、廖海華「(コラム) 平田篤胤と漢籍」

第四部 文獻研究…

佐々木孝浩「日本書籍史における漢籍の裝訂と料紙」、末永高康「『群書治要』―金澤文庫本子部を中心に―」、虞萬里「カラ・ホト出土『春秋正義』單疏本殘葉考―兼ねて近藤正齋手鈔『春秋正義』單疏本を論ず―」、高木浩明「林羅山と古活字版―元和四年刊『老子膚齋口義』を中心として―」、高津孝「琉球の漢學―見られた琉球の文化という視點から―」、武田時昌「古醫書の未來圖」、内山直樹「(コラム) 漢籍の分類と『日本國見在書目錄』」

第一―三部を古代・中世・近世と時代別に分けた後に、

あらためて第四部として文獻研究を立てたのは、各時代の枠組みに収まり切らない論考を「漢籍受容史上における重要な漢籍や事象」として提示するという編者の意圖による。残念ながら限りある紙幅の中で全ての論考を取り上げることが難しいため、特に本誌『東方宗教』および評者の研究と關りの深い分野から數篇を選んで紹介すること、書評の責めを塞ぐこととした。なお本書については、既に白井和樹氏が『史學雜誌』第一三二編・第九號に全體を網羅した書評を發表しているので、合わせて参照されたい。

まず道教と直接關わる論考として、第一部の土屋昌明「日本古代の典籍に見える神仙思想と洞天説の側面」と、第二部の松下道信「中世神道の道教受容―吉田神道所傳『太上説北斗元靈經』版本再論―」を取り上げる。

土屋論文は、日本古代における神仙思想の受容、特に洞天説の影響を、漢籍と日本古代の典籍・詩文との比較から檢證する。日本の典籍に見える「黃泉國」への洞天

説や漢籍の影響から説き起こし、やがて論題は洞天のアナロジーを意識した庭園建築へと至る。土屋論文は、日本古代における神仙思想受容を論じた下出積與氏や和田翠氏、黄泉についての専論を書いた中村啓信氏らの成果を受け止めながらも、「中國思想史の學界でも登場するのが遅かった」という洞天説を切り口として、神仙説の新たな一面を浮き彫りにしてゆく。資料的制約から、直接の影響元となった漢籍を確定できない部分もあるものの、近年発表した関連論文と合わせて、日本の神仙説受容研究の分野に多くの示唆を與える成果であろう。

松下論文は、吉田兼俱が創唱した吉田神道に大きな影響を及ぼした道教經典として「北斗經」に着目し、吉田神道に傳わる北斗經抄本が、吉田兼俱による改作を経たものであるという従來の通説に對し、再検討を試みたものである。松下氏は、近年の三浦國雄氏・山田俊氏らによる北斗經の傳本研究の成果を活用し、吉田神道に傳わる北斗經が、吉田兼俱に改作された傳本ではなく、現存する諸本では失われた、元・徐道齡が注釋を附した當時

の舊本系の原形を留める傳本であることを論證する。そして、この結論に基づき、「吉田神道を打ち立てるに際し様々な偽作や捏造を行った」とされる吉田兼俱像について疑義を呈するのである。松下論文は、吉田神道における一ケーススタディにとどまらず、松下氏自身が述べるように、中世神道の理解に對しても一石を投じる意味を持つものと言えよう。

次に評者も携わる術數分野の研究として、第一部の山下克明「陰陽道・曆道・天文道・宿曜道と漢籍」と、第二部の奈良場勝「中世日本の易神の形成とその後」を取り上げたい。

山下論文では、氏のこれまでの陰陽道史研究の蓄積をベースに、古代の律令官制下にある陰陽道・曆道・天文道、さらにこれらの密接な關りを持つ宿曜道における漢籍受容を論じる。²⁾そこで取り上げられる漢籍の内容は、日時・方角の吉凶や禁忌、六壬占、祓や反閤、祭祀、曆天文占、五行占、星圖など多岐に渡るが、とりわけ『五行大義』『大唐陰陽書』『天文要録』『天地瑞祥志』『三家

簿讀』『格子月進圖』の六書が、平安中期以降、陰陽道の世襲氏族となる加茂氏と安倍氏の基盤をなす書物として受け継がれ、その中に中國で失われた重要な典籍（特に天文書）が含まれていたことの意義を強調する。そして最後にこれらの漢籍受容を「中國術數文化受容」と言い換えた上で、その解明を期待する旨の展望を述べるのである。昨今進展が著しい術數學研究と陰陽道研究が不可分であることを物語っている。

なお後掲の高橋コラムでは、日本古代を代表する星圖である、高松塚・キトラ兩古墳壁畫中の星宿圖についての最新學說を整理しているので、合わせて参照されたい。奈良場論文は、中世末期から近世初期の日本に存在していた「易神」概念の發展から衰退までを考察する。筆者の言う易神とは「易の卦爻の擬人化・神格化」したものであり、具體的には、中世の祭文に「抛卦童子、示卦童郎、六爻神將、飛伏二神、世應兩將」などと見える。（民はこのうち特に頻出する○卦童子・△卦童郎に着目）また、こうした易神に言及する祭文は、元明の戯曲・小説

にも見えており、これらを筆者はそれ以前の民間信仰や説話中の表現などに由来すると推定する。一方、これらの神格はやがて鎮宅靈符などと結びついて後世に傳わるが、近世の儒者たちには受けいれられず衰退してゆくという。もともと奈良場氏の關心は、儒者よりも、庶民の信仰や職業的占い師の受容にあるらしい。氏が戯曲・小説資料に着目するのもこうした理由によるものである。そこから學問と表裏をなす「實占」の世界が明らかになることを期待したい。

このほか第一部の高田論文も、年中行事に關する勘奏とその出典を論じる中で、道教・神仙思想や術數・陰陽五行、さらに災異思想などの影響に廣く言及する。

最後に道教と關りの深い醫史學分野の論文として、第一部の松岡尙則「日本の醫學知識の受容」と、第四部の武田時昌「古醫書の未來圖」を取り上げたい。

松岡論文は、古代から中世にかけて漢籍による醫學知識が日本社會に受容されてゆく過程を描き出したもの。渡來系氏族が醫官の約七割を占めていたとされる八世紀

から、律令國家における醫事制度の成立・衰退を経て、鎌倉以降は民間醫師や僧醫が醫療の擔い手となり、醫療の対象が一般民衆にまで擴大してゆく。その過程で醫學知識は専門家以外の知識人にも受容層が擴大する一方、漢文に不慣れな者向けに和訓や和文による醫書も撰述された。そして、室町時代では醫書の出版が始まったことなどで、醫學知識はやがて公家や戰國大名らにも廣まっていたという。その檢證の中で松岡氏は、我が國最古の現存醫書である『醫心方』と、同じく最初の出版醫書である『新編名方類證醫書大全』を取り上げ、兩書をめぐる人々の交流についても丁寧に論じている。

武田論文は、古醫書をめぐる近年の研究動向と展望をエッセイ的筆致でまとめたもの。傳統醫學の研究が置かれた厳しい状況に觸れながらも、様々な分野の協力者に恵まれて成果をあげてきた共同研究を紹介する。また京都を中心に進展してきた近代醫學史を振り返り、ともすると傳統醫學を等閑視しがちな現代學術の在り方に警鐘を鳴らす。また『醫心方』など、後世に受け継ぐべき古

醫書の價值と活用法につき様々な提言をおこなう。

以上、道教・術數・醫學を中心に内容を紹介してきた。門外漢の評者にとっては、論集全體を通して學ぶところが多かったが、とりわけ裝訂や料紙などを論じた第三部の陳論文や第四部の佐々木論文は大變興味深く讀ませて頂いた。漢籍受容と言えば、知識Ⅱソフト面の議論と思い込んでいた評者としては、ハード面に着目する兩氏の研究に蒙を啓かれる思いであった。

さて、書評を締めくくるにあたり、最後に「日本文化の基層」という副題について考えてみたい。本來、漢籍のような外來の先進文化は、基層に對置される表層の文化と捉えるべきである。それをあえて「基層」としたのは、古代以來、漢籍の知識が受容され、社會階層を越えて深く浸透し、やがて日本文化の基層の主要をなすこととなったという意識によるものであろう。實際、我々が意識せずにおこなっている慣習や行事、その背景にある行動論理や思考には元は漢籍由來の知識であったものが少なくない。一方、基層というのであれば、年中行事や

民俗藝能など文獻學とフィールド研究が交わる分野の成果も必要ではなかったか。近年、文獻學とフィールド研究による學際研究が盛んだが、ここに漢籍受容研究のさらなる發展の餘地も秘められているように思われる。

(A5判、六九八頁＋口繪一六頁、

二〇二二年一月、八木書店、九、〇〇〇圓(税別))

註

(1) 本書については清水浩子氏による書評が『東方宗教』第一四一號(二〇二三年)に掲載されている。

(2) また山下氏は『平安時代陰陽道史研究』(思文閣出版、二〇一五年)第三部第一章「陰陽道關連史料の傳存狀況」において、漢籍を含め當時の陰陽道で用いられた典籍やその史料を網羅的に整理しており、合わせて参照されたい。

(3) 「術數文化」は、本論集にも寄稿している水口幹記氏により近年積極的に使われるようになった術語である。詳しくは同氏「(術數文化)」という用語の可能性について(同氏編『前近代東アジアにおける〈術數文化〉』勉誠出版、二〇二〇年)

寄稿規程

編集委員会

一、寄稿者は本學會員に限り、必ず完全原稿でお願いいたします。枚數制限は以下のとおりです。

論考 四百字詰四十枚程度

研究ノート 四百字詰二十枚程度

書評・新刊紹介 四百字詰十枚程度

國際學界動向 四百字詰十枚程度

なお、論文・研究ノート寄稿の場合には、左記の要旨を添付してください。

○外國語による要旨

要旨の作成は原著者に一任いたしますが、編集委員會が校訂する場合があります。外國語は原則として英語とし、語數は三百語程度とします。中國語表記は拼音(ピンイン)方式、あるいはウェード方式でお願いいたします。

○外國語による要旨の日本語原文

三、寄稿に際しては、「原稿整理票」に必要事項を記入し原稿とともに送ってください。「原稿整理票」の書式は學會ホームページからダウンロードすることができます。

四、本誌に掲載された原稿は、發行より三年経過した後ウェブ上に公開されます。ウェブでの公開を承諾されない方は寄稿時にお知らせ下さい。

なお公開される場合も著作権は執筆者にあります。

五、原稿締切は、一月二十日、六月二十日といたします。

六、内容は未發表のものに限り、探査は當學會に御一任ください。七、抜刷はPDFファイルおよび印刷冊子三十部まで無償。それを超える部數を御希望の場合は、實費をいただきます。

八、特殊製版(圖版・寫真版など)、組み替えなどの費用は寄稿者の負擔となります。

送附先

* 郵送の場合は當學會ホームページ上の連絡先に送ってください。
E-mail: info@taoistic-research.jp
URL: https://www.taoistic-research.jp